

**[新刊紹介] 大阪歴史博物館・関西大学なにわ大阪
研究センター編 『昭和の民俗と世相? : 三村幸一
が写した大阪・兵庫』 『昭和の民俗と世相? : 三村
幸一が写した日本の風景』**

その他のタイトル	[Short Book Review] The Folk Customs and the Aspects of Life in Showa Era
著者	黒田 一充
雑誌名	なにわ大阪研究
巻	1
ページ	35-37
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/16820

大阪歴史博物館・関西大学なにわ大阪研究センター編

『昭和の民俗と世相①——三村幸一が写した大阪・兵庫』

『昭和の民俗と世相②——三村幸一が写した日本の風景』

黒田 一 充

東京オリンピックや大阪万国博覧会が再び開催されることになり、昭和三十九年（一九六四）のオリンピックや昭和四十五年（一九七〇）の日本万国博覧会の映像が紹介される機会が多くなっています。どちらも高度経済成長期を代表するイベントでしたが、そのころの人びとの暮らしや生活の様子が具体的に紹介される機会は、まだまだ多くはありません。

このたび、昭和二十八年（一九五三）から四十三年（一九六八）の人びとの暮らしの様子を記録した写真から、祭りや行事を中心に選り出して編集し、解説を加えた写真集を刊行しました。

写真を撮ったのは、三村幸一氏（一九〇三～一九八）です。大阪で写真店を営んでいた入江泰吉の誘いで、昭和十五年（一九五〇）ごろから当時四つ橋にあった文楽座で人形浄瑠璃の写真を撮り始め、戦災で入江が故郷の奈良へ戻って大和路の仏像や風景を撮るようになって、道頓堀文楽座、朝日座、国立文楽劇場で写真を撮り続けました。文楽の舞台を撮影した写真は、研究者に提供され、文楽を紹介する本が刊行されています。

これ以外に大阪で上演された歌舞伎や演劇、能などの写真も撮っていたようで、それらのフィルムと関連資料が没後遺族から大阪歴史博物館に寄贈されました。そのフィルムの中に、今回掲載した日本各地の祭りや行事、

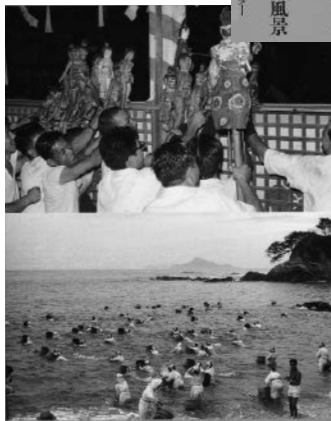
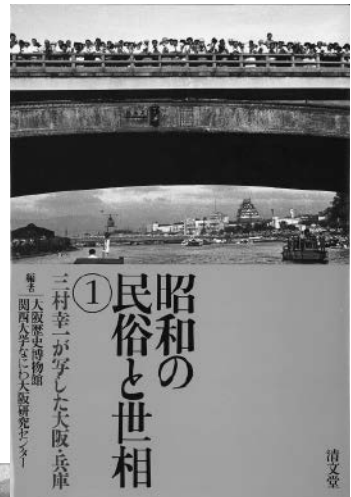
暮らしの様子を写したものも残っていました。五十歳を過ぎてから近畿民俗学会や名古屋のまつり同好会に入会し、民俗学の研究者たちと同行して写真を撮って廻ったようです。

残っているフィルムは三十五ミリ、三十六枚撮りのモノクロフィルムが一本ごとにアルバムへ収録されており、それを関西大学大阪都市遺産研究センターの研究として二〇一二年から一四年の期間でデジタル化と整理、分析の作業を行いました。

現代のカメラほどは性能がよくないため、写りが悪いものも多く、その中から抜き出した写真で三回展示会を開催しました。その時の展示写真に追加してまとめたのが、この二冊です。

編集は、大阪都市遺産研究センターの活動が終了しているため、その後継機関のなにわ大阪研究センターと大阪歴史博物館の編集とし、実際の作業は大阪歴史博物館の澤井浩一さん、大阪都市遺産研究センターのリサーチアシスタントとしてこの研究に関わった吉野なつこさん、筆者の三人が担当しました。

一冊目は、大阪府・兵庫県の写真を集めたもので、大阪市の四季から始まり、北の能勢町から南へ市町村の順に並べています。行事の数が多い四



天王寺と住吉大社は特集にしてみました。後半は兵庫県で、神戸市から順に写真を並べ、年頭行事の追儺式（鬼追い式）は特集としました。現代ではわからなくなっている行事も多いため、写真には短い解説を添えています。

掲載した写真の例を、表紙に載せた写真を使って紹介します。

表紙は昭和二十九年（一九五四）の天神祭で、大川を神幸する神輿船にお供をする供奉船から撮影した風景です。天神祭の船渡御は、祭りの前に鉦を流し、それが流れ着いた下流の岸边に向かっていたのが、江戸時代には松島の旅所（現・松島町）に固定されるようになりました。それが、工業用水の汲み上げなどの影響による地盤沈下で途中の橋の下を船がくぐることができなくなり、この前から逆に上流の桜宮（現・桜宮区）へ向かうように変更されました。多くの人が天神橋の上から見物し、遠くに天満橋と大阪城が見え、低空飛行のヘリコプターが写っています。現在では、橋の上から見下ろすことはできなくなっており、ビルが建って大阪城を見ることができません。

裏表紙の上は、昭和三十五年（一九六〇）に四天王寺で年頭の修正会の結願で行なわれるどやどやの写真で、本来は農村の若者と漁村の若者が集まって、六時堂の天井から投げられる護符を奪い合います。写真は、その天井のところから撮影したもので、護符を手に入れるために上を向いて手を伸ばす様子が見えます。下は同年八月の住吉大社の夏祭り（現・住吉大社）で、堺の宿院（現・宿院）へ向けて出発するため、多くの人が神輿（鳳輦）（ほうれん）を担いで境内の反橋（太鼓橋）を渡るところです。この翌年、宿院の社殿を修築するため神輿の渡御は中止になり、その後も平成十七年（二〇〇五）まで、神輿は車に載せて運ばれるようになります。それぞれ、祭りのクライマックスの場面をうまく画面に切り取っている写真です。

二冊目は、京都府、奈良県、滋賀県など近畿地方を中心に、東北から九州まで全国各地の祭り・行事の写真を収録しました。最初に京都市内の行

事を正月から大晦日まで追い、奈良県でも、年頭の村の境界などに掛ける勸請縄、田植の所作を演じるおんだ（御田植祭り）、東大寺二月堂の修二会（お水取り）、端午の節供のノガミ行事など、季節の順に写真を並べました。表紙の写真は、昭和二十九年（一九五四）の祇園祭の様子です。現在は四条通から河原町通を北上し、御池通を西に進みますが、この当時の山鉾は寺町通を南へ下って松原通を西へ進んでいました。翌年でこの巡行路はなくなりません。手前の家の屋根の上から撮った迫力ある写真です。

裏表紙の上の写真は、福岡県吉富町・八幡古表神社で昭和三十六年（一九六一）に撮影された傀儡子舞です。宇佐神宮と関係のある神社で、現在は四年ごとの閏年に奉納されます。神々を表す人形を動かしている様子を舞台裏から撮った写真で、右手に写る大きな行司をしている神の陰になっている小さな住吉神が、左側にいる大勢の神々と相撲を取って勝利する場面です。文楽を長年撮っていただけあり、シャッターチャンスをよくとらえています。

下の写真は、昭和三十八年（一九六三）の三重県鳥羽市の沖合に浮かぶ菅島のしろんご祭です。年に一度この湾で鮑を捕ることが許され、一斉に海女さんたちが海に泳ぎ出します。今は海女さんの数も減り、磯着ではなくウェットスーツで海に潜ります。

写真の選び出しは、彼が得意とした民俗芸能や、現在行なわれていない祭りや行事、背後の風景がまったく異なるところをとくに選びましたが、解説文を書くために撮影時に近い調査報告書を書いたところ、その報告書の記述と同じ様子が写真に記録されていることに驚きました。

三重県志摩市安乗の年越し行事の撮影は、昭和三十七年（一九六二）ですが、その様子は岩田準一の『鳥羽志摩の民俗』（一九六九年）の記述の通りです。当時は旧暦の大晦日に豆まきが行なわれていました。旧暦の大晦日は節分に近い日程となり、節分の夜は大晦日の夜と同じように年越しの

夜であることがわかります

三重県名張市神屋の吉原地区では、氏神社が別の神社に合祀されても、かつての氏神社の天王祭を続けていたようです。現在ではなくなった行事のことを地元の研究者の中貞夫が『名張の民俗』（一九六一年）に記していますが、その記述と刊行の前年に撮影された写真の様子が一致しています。ほぼ同じ時期の調査と撮影なので一致するのは当然のことなのですが、これらの本には写真が掲載されておらず、これまではそこに記された文章から想像するしかなかったのが、具体的な様子がわかる写真が見つかったのは貴重なことですので、収録写真の数を少し増やしました。

このほかにも、出版社からの提案で本の題名に世相という語を入れたのにも関わらず、一冊目では当時の暮らしをうかがえる写真は四天王寺境内の露店ぐらいいしか収録できなかったため、二冊目では生活の記録として、町並みや山村、漁村の風景、牛が運搬をしている様子、子どもの遊びなどの写真を収録する章を設けました。

高度経済成長期で変化する前の昭和の風景を懐かしく思う方、まったく知らない時代を記録した資料としてとらえる方など、読む人によってそれぞれ印象は異なるでしょうが、一度手に取っていただければ幸いです。

『昭和の民俗と世相①』二〇一八年二月、A5判 二四七頁 本体二六〇〇円、『昭和の民俗と世相②』二〇一八年十二月、A5判 二八〇頁 本体二八〇〇円、清文堂出版）

（くらだ かずみつ 関西大学なにわ大阪研究センター副センター長、
関西大学文学部教授）